

日本語論究 6

語彙と意味

名古屋・ことばのつどい編集委員会

編

研究叢書

日本語論究6

語彙と意味

名古屋・ことばのつどい編集委員会 編

江苏工业学院图书馆
藏书章

和泉書院

研究叢書 248

日本語論究 6 語彙と意味

一九九九年十二月二十五日初版第一刷発行

(検印省略)

編者 名古屋・ことばのつどい

編集委員会

〒464-0814 名古屋市中千種区不老町一
名古屋大学文学部国語学研究室発行

発行者 廣橋研三

印刷所 日本データネット

製本所 大光製本所

発行所 鶴和泉書院

大阪市天王寺区上汐五丁目三八

〒543-0002

電話 〇六・六七七一・一四六七

振替 〇〇九七〇・八一五〇四三

ISBN4-7576-0037-2 C3381

目 次

語彙研究において混同してはならない四つの観点	田 島 毓 堂	1
発話動詞の分析(2) ——「呼ぶ」の多義構造の記述を中心に——	初 山 洋 介	21
「とりたて」形式の構文的特徴と意味機能 ——とりたて詞と係助詞・副助詞——	宮 地 朝 子	51
『英語箋』から二つの『改正増補英語箋』へ ——書誌が語る出版事情——	櫻 井 豪 人	89
動詞「とおる」の多義構造	鷲 見 幸 美	127
使用頻度ゝ0ゝの語の語彙の分析 ——『源氏物語』（桐壺巻）を使った語彙研究——	広 瀬 英 史	151
マレー・日本両言語の比較語彙論的研究 ——基本語彙の意味分野別構造分析——	ザイド モハメドズイン	169
白秋童謡の擬音語	加 藤 妙 子	197
日中語彙の比較研究 ——感情語彙を中心に——	林 玉 恵	213

擬するということ ——『小夜衣』の語の一側面——	山本いずみ 山口 榮 作	261
韓国語の語彙分類表の作成方法 ——日韓両言語の語彙比較のために——	韓 有 錫	291
日本語・インドネシア語における身体語彙慣用句の比較研究 ——意味分野別構造分析のためのコードづけ基準についての試み——	アグス スヘルマン スルヤディムリア	313
動詞分類に見るインドネシア語と日本語の語彙内在アспект ——構文的なアспект表出との関係において——	ナンダン ラフマツ	345
言語学・日本語学・方言学	丹 羽 一 彌	375
馬、隙を過ぐ ——名古屋・ことばのつどい20年の歩み——	田 島 毓 堂	389
断定辞ナリの成立に関する補論 ——万葉集と宣命を資料として——	釘 貫 亨	442 (1)
『物類称呼』と『和訓栞』の異同 ——「南部」と「南都」との混同——	田 島 優	420 (23)

語彙研究において混同してはならない四つの観点

田 島 毓 堂

0. はじめに

語彙を観察し分析するに際して、はっきり区別しておくことにより、そうでなければ知られなかったことが、明瞭に見えてくることがある。このことは、単に、語彙研究には限らないことだろう。従来、語彙を総体として扱う際、ともすれば、その区別が忘れられたかみえることもある、語彙に対する二つの視点と二つの規定量について、それらを語彙研究上混同してはならない重要なポイント四観点として考察する。

要旨

四観点とは、①単位と総体、②規範と実現、③異なりと延べ、④単純語（≒語根）と複合語の四つである。これらの観点が、語彙論において区別されず、混同し論ぜられていることがある。①は「単位」を「語」と、「総体」を「語彙」と言い換えることが出来る。この両者が混同されるのは、用語の問題としてであるが、この用語の混同に基本的問題がある。②「規範」はラング的側面であり、「実現」はパロール的側面といえるが、この混同も散見する。③「異なり」は決して「延べ」を代表できないし、逆も同様である。④語構成研究においては、単純語≒語根がいかに複合するかが考察の対象になるが、総体としての語彙研究においても、この両者はいろいろな場面において独自の意味を持つ。語彙の無限性は複合語において起こる問題である。語根は有限である。

1. 単位と総体

部分と全体といってもいい。語彙は語の集合である。語は語彙の単位であり、要素である。ただ、語彙の単位は語だと称しているが、必ずしも自明のことではない。語も一つの単位に過ぎないかも知れない。このことはここでは深入りしない。第一、語の定義自体確たるものがない。これを無定義要素ですませることが長く続いている。しかし、最低限の定義は必要ではないかと思う。語の定義はそれを論ずる人の数ほどある、つまり、個人個人で違うといわれる。しかし、最も素朴な感覚を基本にした定義に従えば必ずしもそうではなかろう。それも一つの定義だといわれれば、それまでであるが、私はこの際、その、素朴であると思われる規定に従うことを表明する。その意味において、ここに改めて極く簡潔にそれを規定しておく。詳しくは、別稿に譲る。私は難しい議論を展開しようとは思わない。面倒な議論もしない。極く簡単に要点を述べておこう。実に簡単なことであるが、これで十分であるし、言葉の本質に通ずる定義であると思っている。

それは、人々が、「それは一語だ」あるいは「それは一語ではない」というところの「一語」である。その「一語」とは何であるか。明らかにそうしているものがある。私はその「一語」、それは必ずしも厳密なものではないが、その感覚を大事にしたい。細かな、煩瑣な理屈ではない。それを学問的でないという人があれば、その批判は甘んじて受けよう。しかし、それでは学問的とは何かということだけは是非聞かせてほしいと思う。わかりやすいことをわざわざわかりにくく説明することを学問的だとは私は思わない。その意味で、私は語彙調査の単位として学校文法にいう「文節」を用いることにしている。これは、もっともコンセンサスを得やすいものだからである。つまり、最も簡単で、日本語人（日本語を母語とする人をこういうこととする）の原始的感覚に合致しているからである。文節に分割した後に、その中を自立語と付属語に分け、結果的に文節の核になっている「語」を抽出する。初めから、語を抽出するのと同じ事かも知れないが、この方が遙かに容易であ

ることは、私の試みたいいくつかの実験によって知られた。

言葉の最も本質的なものは音声言語であり、文字言語その他は後天的なものである。文節が割合安定しているのは、この音声言語に基づいているからである。もちろん全く問題がないわけではないが、今はそのことはおくこととする⁽¹⁾。少し定義らしく述べれば、それ以上細かく切って発音するならば、その語の持つ意味が正しく表現できなくなる限界が一文節であり、その中に付属語を含むならば、それを分離したものを自立語とする。複合語か否かの判定もこれによって行うことが出来る。個々の付属語については、従来の研究の積み重ねがあり、改めて定義せずとも、それに依ることは十分合理性があると考ええる。

同じ形をしていても、それが複合語か単純語の連続かは、実際に両方あり得るが、切って発音しても意味が変わらないものは2語の連続、別の意味になってしまうならば、それは1複合語と見る事が出来る。意味の面を重視して考えたい。これだけでうまくいかぬ事もある。特に、複合動詞の場合は、「うっちゃる」とか「ぶんなぐる」のように、2語が融合してしまい、語に切れ目をおきにくくなったもの以外は、要素ごとにきって発音しても、若干の不自然さはあっても、もとの語と、意味不通とか、意味不明とまでは行かないのが通例で、複合動詞の処置は、「～しおわる」「～しはじめる」などのアスペクトを示すものとともに、容易ではない。これらも通常の発音では一続きに発音され、他の複合動詞と変わったところはなく、文法論的には一語とは認めにくいことは当然であるが、ひとまとまりであることは否定できない。これを一般の複合動詞と区別するには、別の基準がいることになる。あるいは、複合動詞そのものが、少数の例外を除いて以前から言われているように、一語とは認められないということになるのか。更に別稿を用意して考えるが、その中心になる部分を述べた。

これは、たとえば、インドネシア語の複合語の判断にも通じる。インドネシア語はローマ字で表記し、原則として語と語との間はスペースで区切られる。ところが、そのスペースで区切られたものでも、二つ合して一複合語に

なるものがある。それは、そのスペースで切って発音したら別の意味になってしまうのである。“kamar kecil”は「便所」の意味である。これを“kamar (部屋)”と“kecil (小さい)”と切って発音することはない。強いて切って発音すれば、「小さな部屋」の意味になる。最も、その場合は間違えないように“kamar yang kecil”と関係代名詞“yang”を入れていう。英語の“a rest room”も同様“rest”と“room”は一続きで、これを離して発音することはない。こういうことは当然他の言語においてもあるであろう。それ以上小さく切って発音すれば、別の意味になったり、意味が通じなくなったり、語でさえなくなったりする限界があるだろう。これを一語のまとまりとするという規定は、割合汎用性があると思う。分かち書きをする言語においては、その表記法に、たとい、揺れがあるとしても、一応、区切りの目安があるということである。もっとも、それが直ちに一語ではないことも、十分承知しておくことも必要である。

語の単位の問題はともかくとして、単位と総体といえ、それを混同しようもないと思われるが、語は紛れもなく語彙の単位（またはその一つ）であるに関わらず、各所で「語」を称して「語彙」と言っている。すでにこの誤用については、随分指摘し続けている⁽²⁾。その逆に「語彙」を称して「語」と言うことは見かけない。「語彙」そのものをあえて言うことがないためかも知れない。「語彙的」「語彙数」という言い方に誤りが多い。語彙研究の論文にすら「語彙数」と見られるのであるから呆れるほか無い⁽³⁾。この誤用の原因等については、語彙論の現状から説明できる。これを混同しないために、私は「語彙元素論」「語彙総体論」という用語を提案した⁽⁴⁾。語彙論は両者を包含するものであるから、あえて、こんな用語をわざわざ作る必要は無いともいえる。しかし、強いてこれを提案するのは、語彙論と言っても個々の語の研究しかイメージしない多くの人がいる一方で、語彙論は文字通り「集合としての語彙」のみを対象とするものであって、個々の語を対象にするものは含めないという立場もあり、これはかなり強力である⁽⁵⁾。こういう状態では、「語彙論」が時として別の内容を指し示すことになってしまい、誠に不都合

である。それゆえ、この区別の必要が無くなることを期待した上で、当分の間は用語として区別しておいた方が無難だと思われるので、こういう提案をしたのである。

この観点に関して混同されているのは、主として用語の問題であり、中味の問題ではないが、ある意味では、「語彙論」という用語自体が指し示す内容にも関わることである。私は語彙論は、語彙の単位と、語彙の総体とを、ともに対象にすべき分野であると考えている。

なお、これは一部繰り返しになるし、言わずもがなのことだと考えるのであるが、やはり、一言しておかねば、誤解が生じるといけないので、あえて述べる。語彙論が、その単位の論、つまり、個々の語についての論を含むことについてである。これについては、自明だと思うが、必ずしもそうではなく、語についての論は、語彙論ではないとする立場がある。私はこれに組み合わないが、そういう立場があるので、あえて、言い添えておく。音韻論でも、文法論でも単位についての論と全体についての論を分離しないと同様に。

2. 規範と実現

⁽⁴⁾
集团的規範と個別的実現の区別である。ラングとパロールにほぼ相当する。こういえば、両者を区別することは当然と思われるであろう。ところが、実際を見れば、これを混同することがあり、そのために何がなんだか分からなくなることがある。語彙を論ずる場合、私は、意味を除外しては成り立たないと思うが、そうすると、直ぐ出てくる疑問が、個々の語に対して意味を考える場合、一語一語は必ず一定の文脈にあって、場合場合によって意味が異なるのであるから、一律にそれを考えることは出来ないだろうということである。

確かに、個々の語彙（＝個別語彙、個々の言語作品・言語資料の語彙をこのように称する）においては、その語彙を構成する語を考える場合、それぞれの文脈に現れた意味を無視することは出来ない。もし、そうすれば、如実な意味の観察にはならない。例えば、モノという語が、「者」なのか「物」なの

か、または「そういうものだ」などという抽象的な「もの」なのかを区別する必要がある。それかといって、文脈によって意味が異なるから、文脈を無視しては語彙研究は成り立たないという言い方は正しくない。

それは、個別語彙、つまり、個別作品・個別言語資料の語彙を対象にするときはその通りなのであるが、語彙研究は個別語彙の研究ばかりでなく、一般的に「集団規範語彙」を対象にすることもある。この場合は、個々の語は文脈を離れた存在である。むしろ、「語」を、具体的文脈にあるときは種々の意味に顕現するところのものとして、つまり、意味の可能態として捉えらるべきものであると考える。具体的取り扱いとしては、多義語を考えるとわかりやすい。すなわち、多義語といっても、個別語彙、つまり、個々の作品の一つ一つの出現に際しては決して「多義」としては現れない。多義として登録されるうちのどれか一つの意味において具体的には現れるのである。もっともわざわざ、一語に両義を兼ねさせることがないわけではない。和歌の掛詞はその典型である。詩においても言葉に両義を持たせることは多い。又、普通にも、駄洒落として二義を兼ねさせることはあるが、通常、言葉は一義を保つことを、言葉の機能を保つために要求されているといってもよい。むしろ、多義を帯びることは言葉としての存在を脅かしかねない。その危険を冒して、掛詞や、駄洒落がある。要するに、個別の実現においては、一語は一義が普通であり、多義語が問題になるのは、集団的規範語彙の場合であり、その処理は、辞書がそうしているように、すべての意味を認めるということに尽きる。

しかし、確かに多義語についてはなかなか難しい問題があり、語彙研究についての疑問も、多義語の扱いについてのものが多い。やはりこれも、規範と実現をはっきり意識すれば解決不能なほど難しいものではない。それですべて解決するものではないにしても。すなわち、ある語がいくつもの意味を持つことは珍しいことではない。コード化する場合それをどうするのかという事が、多くの疑問のうちで一番多い。では、その語がいくつもの意味を持つ時とはどういう場合か。具体的文脈について言えば、その意味を確定する

ことが難しいことはあっても、いくつか意味のあるうちのどれか一つで出現しているのである。決して、いくつかある意味のいくつかか、あるいは、そのすべての意味で出現するのではない。もちろん、掛詞という修辞法においては、わざわざ複数の意味を一語に持たせるのであるし、いわゆる、駄洒落もそういうことをねらっている。しかし、それは、決して多義語の問題ではない。一語が多義であるのは、集団的規範においての問題である。その場合の扱いは、前述のように、辞書の扱いと同じ事であり、すべての意味にコードを付けて並列しておくことになる。語は、意味の可能態としてあるものであり、実際にはそのいずれかの意味で出現するのである。

先頃発表した『漢字語素コード』（語彙研究法報告3 1999）は、この考えのもとに常用漢字にコードが与えてある。

多義語の問題も、規範と実現をはっきり区別して考えれば、特別のことはないのである。時代によって意味に差があるということ、用法の違いがあるということ、分野によって意味の相違のあること、地域によって違いのあること、等々種々の故障を構えてコード化を渋る向きがあるが、すべての意味をコード化すればいいのである。実際に使うのはそのうちの一つである。

総体としての語彙の本格的研究に道を拓いた阪倉篤義氏の「万葉語彙の構造—（その一）名詞について—」（『万葉』34 1960）において、阪倉氏は次のような方針を立てられた。その一つに「三、たとへば「胡粉（しらに）」「氈（かも）」「鶴（つる）」のごとく、訓仮名としての用法によつて、その存在の推定し得る名詞も採る」とあるが、名詞の「しらに」も「かも」も「つる」も、個別語彙としての万葉集にはない語である。それを万葉集の表記から、その時代に存在していたものとして採用すると言われるのである。確かに万葉時代の規範語彙としてはあったのであろうが、個別的実現としての「万葉集」には存在しない語である。これは、その使用回数まで問題になる延べ語数を使えば、度数0ということになり、こういう問題は起こらなかったはずである。異なり語として扱ったために、これが見逃されてしまったということだが、規範語彙と個別語彙の区別が意識されていさえすれば起こらなかった

たはずのことである。しかし、これはこの時点では仕方のなかったことであり、今後注意すべきことである。

また、同論文で、固有名詞の人名・地名は採らないとされることについても、考える必要があろう。いくつかの語彙調査において、固有名詞が省かれることがある。それは、規範語彙を考える場合は、人名や地名はさほど重要なものではあるまい。しかし、個別語彙として、ある語彙を観察する場合には固有名詞は大変重要なものになる。例えば、「かぐや姫」というだけで「竹取物語」が想起されるし「光源氏」も源氏物語を代表する。イラクのフセイン大統領やゴルバチョフ大統領・ブッシュ大統領という人物が、「湾岸戦争」時代の新聞記事の中心にある。自動抄録の作成方法を考えると、最初に自動的に語彙調査を行い、その結果から、基幹語彙的なものを除去して残ったいわばキーワード的なものを中心として抄録が作成されるが、その中には必ずと言っていいほど固有名詞が出現する。個別語彙で固有名詞を除くことは理由のないことで、先の、三の方針と合わせてみると、阪倉氏は万葉時代の集団規範的な語彙を念頭においておられたのかも知れないと思うが、固有名詞を除くことは、他の語彙調査に影響されたのかも知れない。その、全体の趣旨から見れば、紛れもなく個別語彙としての「万葉集の語彙」を対象にされているのである。規範と実現について必ずしも、厳密に分けておられなかったとしかいいようがないように思う。

先にも少しふれたが、使用頻度や延べ語数を考えるのは個別語彙についてである。規範語彙においては、ある語があるかないかということだけが問題である。つまり、異なり語だけが問題になる。個別語彙に於いてはこの両者が関係する。このことについては、次に詳しく述べる。又、これに関して、「語彙量」を単に異なり語数のみをさして使う使い方がされることがあるが、語彙量には、異なり語数と延べ語数の両者がある。

3. 異なりと延べ

標題としては「異なりと延べ」としたが、この用語については、別に述べ

たことがある（「異なり語と延べ語」平成七年秋季国語学会 1995.10.22 新潟大学）。「異なり語」という用法は、正当でないという批判もあった。確かに、当初は「異なり」「異なり語数」および、「延べ」「延べ語数」という形で用いられている。ただし、これは随分早くから「異なり語」という言い方で使われている。むしろ「異なり」とだけ言っただけでは、一般の言葉と紛れてかえってわかりにくいこともあり、むしろ「異なり語」という方がよいと思う。このことについてはすでにその定義とともに「語彙論のための用語」（『名古屋大学文学部研究論集 文学』44 1998）に述べた。もちろん、その語数をいうときには、「異なり語数」「延べ語数」という。

従来、この両者は、定義自体ははっきりしているが、それらが持つ意味を十分に説明したものがなかった。語彙を扱う際、特に説明することもなく、異なり語だけを問題にしたり、両者をともに扱ったりしていた。一方が他方を代表することが出来るならば一方を使えばよい。それならそれで、そのことをきちんと説明し、証明した上でなければならないが、一向そういう説明はない。異なり語が延べ語を代表することが出来るなら、もちろん、異なり語の方が小さな数字ですむから、扱いが簡単であるが、決して、異なり語は延べ語を代表することは出来ない。逆に、延べ語では、詳しく見ていけば、異なり語は全部出現しているのであるが、語彙の一般的特性として、少数の使用頻度の高い語が、使用率から見れば大きな比率を占め、使用度数の小さい語は、片隅に追いやられたようになり、同等の地位を主張しにくい。やはり、異なり語は異なり語として扱う必要がある。もっとも、ある語が、存在するか否かはもちろん延べ語表で分かるが、語の存否を知るには、むしろ五十音順の語彙表が便利である。とにかく、異なり・延べのどちらか一方が他方を代表することは出来ない。ただ、このことは、「表」としてそれを示すときに、別々に示さなければならないということではない。一つの表で両者を見ることが出来る。ただ、その扱いは別にしなければならないということである。

それでは、この両者が意味するところを簡単に言えば何か。実は、簡単に

はなかなかいえない。しかし、強いて言えば、少し比喩的であるが、次のようになる。

異なり語は「その語彙の世界の広さ」を表し、延べ語は「その語彙の世界のあり方」を示すとしてもいえるか。異なり語は、その語があるかないかのみが問題である。何回使われようと関係はない。ただ一回しか使われぬ語も、使用度数第一位の語も同等である。その価値に何らの違いもない。このことを考えると、非常に数の多い度数⁽⁶⁾1の語について考え、それを、語彙分析に反映させるには、異なり語で語彙を扱う必要があるということを示す。ただ、それをどう扱うかは簡単ではない。使用率を排除することは簡単にできるけれども、それではどういう観点でそういう頻度の低いものをすくい取るかである。品詞や語種・語構成といった観点からも考えてみる必要はある。しかし、それだけでは、低頻度語を十分すくい上げることは出来ない。ただ、低頻度語がどういう品詞に多いのか、語種としてはどういうものか、語構成的にはどうかを説明するだけであり、それはもう語彙の一般的特性として、予め分かっているとさえいえるのである。基本語的でないものともいえる。個別語彙でどういうものが低頻度語・最低頻度語としてあるかはやはり、意味の観点を導入しなければ、それを十分説明できないのである。

一方、延べ語ではその使用頻度数が付いてまわる。語の重要度ということも問題にできる。異なり語が「何を」表現しようとしたかを示すのに対して、その「表現の仕方」も問題になる。何がその語彙にとって基本的な語かも分かる。逆に、頻度の低い語も分かる。ただ、頻度の低い語が、どういう性格の語かは十分検討しなければならない。そういう研究はまだまだ僅かしか⁽⁷⁾ない。

異なり語と延べ語の関係で問題にされるのが、一語平均使用回数である。いわゆる NK 値である。延べ語数を異なり語数で割った数字である。この数字だけを見ていると一体これが何を表すのか見当が付かない。大きな語彙では自然異なり語数も大きいし、延べ語数も多い。大体、この一語平均使用回数も大きくなる。単純に考えるならば、一語平均使用回数（以下、NK 値

という) が大きいということは、同じ言葉を何回も使うということで、ある意味で語彙の貧困を示すともいえる。しかしそういつてしまえるか。簡単にそんなことはいえない。宮島達夫氏編の『古典対照語い表』を使って、次のような表(次頁)を作った。

これによれば、異なり語数の一番少ないのが、土佐日記の984語、延べ3496語、延べ語数で一番少ないのが方丈記の2527語、異なりは1148語である。この二作品では延べ語数と異なり語数とで、ねじれがある。この二作品だけから見れば、方丈記は土佐日記に比べて語彙が豊富だといえる。そして、その理由も大体は推定できる。日並みの日記の体をなしている土佐日記では同じような語句の繰り返しは当然である。一方、方丈記のような短編の随筆文学で同じ語の繰り返しは、是非とも必要な語を除いてはなかろうということである。

しかし、その他の作品になると、作品の規模も違い、NK 値の大きさが相互に何を示すかは簡単にいうことは出来ない。その作品の大きさに必ずしも平行して大きくなってはいないけれども、概して言えば、規模が大きくなれば、大体 NK 値も大きくなっている。つまり NK 値は語彙の規模に従って緩やかに大きくなっている。これは全く当然のことで、このことは何も特別のことを意味しない。つまり、作品が大きくなるということは、延べ語数で言えば単純に増えていくことである。しかし、必ずしも、その延べ語数の増加に正比例して異なり語数は増えない。そのような至極当然のことを示しているに過ぎない。それでは、一体これはどういう意味があるのか。説明はどこにもない。一体全体、これはどういう意味があるのであろうか。

異なり語数か、延べ語数かどちらかが大体等しいものについては、あるいは、上に述べた土佐日記と方丈記のように、延べと異なりとが交差しているものについては、その語彙の豊凶をいうことは出来る。しかし、それだけなのか。それだけではあるまい。

突飛なたとえであるが、世界の乳児死亡率は18強だという。つまり、1000人の新生児のうち、18人強が、乳児段階で死亡するというのである。これは、

表 1 語彙指標

	作品名	異語数	延語数	平均	C50	率(50)	F 1	率(1)	使用率(1)
1	方丈記	1148	2527	2.20	152	13.240	782	68.118	30.945
2	土佐日記	984	3496	3.55	76	7.723	514	52.235	14.702
3	竹取物語	1312	5124	3.90	97	7.393	712	54.268	13.895
4	伊勢物語	1692	6931	4.09	95	5.614	925	54.669	13.345
5	更級日記	1950	7243	3.71	136	6.974	1105	56.666	15.256
6	紫式部日記	2468	8737	3.54	180	7.293	1408	57.050	16.115
7	古今集	1994	10015	5.02	103	5.165	1033	51.805	10.314
8	後撰集	1923	11955	6.21	97	5.044	885	46.021	7.402
9	徒然草	4240	17112	4.03	187	4.410	2464	58.113	14.399
10	蜻蛉日記	3598	22398	6.22	100	2.779	1885	52.390	8.415
11	大鏡	4819	29212	6.06	142	2.946	2495	51.774	8.541
12	枕草子	5249	32905	6.27	155	2.954	2855	54.422	8.676
13	万葉集	6505	50070	7.69	184	2.828	3246	49.900	6.482
14	源氏物語	11419	207792	18.19	156	1.366	4693	41.098	2.258
15	14作品	23877	415517	17.40	209	0.875	11404	47.761	2.744

	作品名	和異率	和延率	漢異率	漢延率	混異率	混延率
1	方丈記	78.0	88.4	20.1	10.6	1.8	0.9
2	土佐日記	94.1	96.4	4.5	2.9	1.4	0.7
3	竹取物語	91.7	94.9	6.7	4.3	1.6	0.8
4	伊勢物語	93.7	97.1	5.3	2.6	1.0	0.3
5	更級日記	90.8	95.1	7.5	4.1	1.7	0.8
6	紫式部日記	85.3	88.5	11.2	9.8	3.5	1.8
7	古今集	99.8	100.0	0.1	0.0	0.1	0.0
8	後撰集	99.6	99.8	0.3	0.2	0.1	0.0
9	徒然草	68.6	86.6	28.1	12.1	3.3	1.3
10	蜻蛉日記	91.1	95.8	6.6	3.5	2.3	0.7
11	大鏡	67.6	81.8	27.6	15.6	4.8	2.6
12	枕草子	84.1	91.9	12.2	6.6	3.6	1.5
13	万葉集	99.6	99.9	0.3	0.1	0.1	0.0
14	源氏物語	87.1	95.6	8.8	3.4	4.0	1.0
15	14作品	82.4	94.6	13.6	4.5	4.0	1.0

この表は、宮島達夫氏『古典対照語彙表』によって作成した。延べ語数の小さいものから順に並べてある。各項目は、作品名・異なり語数(異語数)・延べ語数(延語数)・一語平均使用回数(平均)・累積使用率50%に達する語数(C50)・C50の異なり語に占める割合(率50)・度数1の語数(F1)・度数1の語の異なり語に占める割合(F1率)・度数1の語の使用率(使用率1)・和語の異なり語数に占める率(和異率)・和語の使用率(和延率)・漢語の異なり語に占める率(漢異率)・漢語の使用率(漢延率)・混種語の異なり語に占める率(混異率)・混種語の使用率(混延率)である。() 内項目名。